

体育授業における児童同士の肯定的な関わり合いを促進するための方策に関する研究

スポーツ文化研究領域

5011A002-1 青木 彩菜

研究指導教員：吉永 武史 准教授

【研究の背景】

現代の子どもたちはコミュニケーション能力が不足していることが指摘されている。そのため体育科でも、子どもの関わり合いを促進するための様々な実践がなされてきた。しかし、それらの実践には、態度面や技能面などに関して多くの課題が残されている。さらに、集団で活動すれば自然発生的に児童同士の関わり合いが行われるという誤った認識もみられる。また、共同的学习モデルなどの有効とされる方策についても、その有効性を検証した実証的研究は少なく、通常の体育授業で取り入れられるまでには至っていない。

【研究の目的・方法】

本研究では、体育授業における教師の児童同士の関わり合いを促進するための方策に注目し、種目間における児童同士の関わり合いの相違と、教師の方策に対する児童同士の関わり合いの様子を分析していく。研究の方法としては、まず先行研究の成果および課題を検討し、その上で2単元ずつ集団種目ならびに個人種目の実践授業を行う。そして、その授業実践において教師が用いた方策と児童同士の関わり合いの様子を分析し、その方策の有効性について検討する。なお、4つの授業では抽出グループの児童と教師の発言の逐語記録を作成し、カテゴリー分析を行う。さらに、教師への体育授業の方針などに関するインタビュー

や児童による形成的授業評価も合わせて実施し、それらとの関連性についても検討していく。

【第1章】

ここでは、体ほぐしの運動の教材として注目されたチャレンジ運動、個人種目を集団化した授業実践、そして共同的学习モデルと仲間学習モデルの概要、そのモデルを活動した授業実践について論じた。まず体ほぐしの運動は、心と体を解きほぐし、自分の心の声に耳を傾け、自身の体と向かい合うような心と体を一体としてとらえる体育のために導入された。さらに仲間との交流を通して、自分のことだけでなく他者の心や体にも目を向けるような取り組みが期待されている。次に、個人種目の集団化では、個人種目を集団で取り組むことによって、個人で味わう達成感に加えて、仲間との一体感や仲間に対する意識、仲間同士での教え合いが新たな楽しさや学習意欲を喚起し、技能の向上にも著しくよい効果をもたらすことを期待して取り組まれた。最後に、共同的学习モデルでは、児童同士の関わり合いを促すことを目的とし、そのための要素が存在するということが確認された。そして、いずれの方策においても、それらの方策を有効に機能させるためには教材に加え教師の働きかけが重要であるということが確認された。

【第2章】

ここでは、2つの集団種目（集団AならびB）の授業実践について比較・検討した。まず教師の指導の違いとして、①アドバイスを徹底したこと、②励ましや応援などの声かけを積極的に行わせたこと、③早期段階でトラブルを解決させたことという3点が挙げられた。これらが十分に機能していた集団Aの授業では、児童同士の称賛や応援、アドバイスなどの肯定的な関わり合いが非常に潤沢に行われていた。一方、上記のような教師の指導が十分ではなかった集団Bでは、ゲーム中のトラブル等の影響により、児童同士の否定的行動が観察されるなど、2つの授業実践において児童同士の関わり合いに差異が生じた。このことから、集団種目では仲間と活動することによってマイナスの相互作用が生じる場合もあるということが確認された。よって、児童同士の肯定的な関わり合いを促進するためには、教師が仲間との関わり合いに関する指導や注意などの働きかけをする重要性が示唆された。教師からこれらの働きかけがあることによって、仲間へ肯定的な声かけをする雰囲気形成され、ゲーム中の勝敗やトラブルに関わらず仲間に対して肯定的な感情を抱くことができたと考えられる。

【第3章】

ここでは、2つの個人種目（個人AならびB）の授業実践について比較・検討した。まず教師の指導の違いとして、①励ましや応援の声かけを積極的に行わせたこと、②グループ内で必ずフィードバックをするなどの、役割を与えたこと、③他グループとも交流を持たせたこと、④授業の最後にイ

ベントを用意したことという4点が挙げられた。これらが十分に機能していた個人Bの授業では、児童同士の肯定的な関わり合いの発言が全体の半数を占めており、非常に活発に行われていた。一方、上記のような教師の指導が十分ではなかった個人Aの授業では、児童同士の発言自体が非常に少なく、児童同士の肯定的な関わり合いはほとんど行われていなかった。集団Bの授業では、仲間との教え合いによって技能が向上するということを児童に理解させ、児童同士で教え合いをする機会を保障していた。よって多くの児童が、個人種目であっても仲間と協力して活動できたという実感が得られたと考えられる。このことから、個人種目においては、教師が意図的に児童同士の関わり合いを促進するための方策を導入するか否かにより、児童同士の教え合いなどに非常に大きな差が生じるという示唆が得られた。

【結章】

4つの授業実践から、児童同士の関わり合いの差は、種目によって生じるわけではなく、教師の指導の違いによって生じるということが確認された。よって、個人種目であれ集団種目であれ、教師が児童同士の関わり合いを意図してそのための方策を導入することによって、児童同士の関わり合いが潤沢に行われると考えられる。

今後の課題としては、ハイタッチなどの非言語的コミュニケーションに関しても取り扱ったり、個人レベルで児童の発言回数や発言対象を計測していくことで、より細かく児童同士の関わり合いに関する分析を進めることができると考えられる。